Chapter 24 : **妖精の炎、記憶と今**

秋風に舞う紅葉をかすめながら、ガラルギャロップは馴染み深い石畳の道を駆けていた。  
そのたてがみは、遠きガラルの記憶を宿すように、淡く輝いていた。

最近耳にした噂――  
《PsychicPrincess》という名の、鮮やかな謎解きプレイヤーが《トリック＆トラップ》イベントを完全突破したと。

その名に引かれ、導かれるように、彼女は町の大図書館へと向かっていた。

――そして、いた。

静かな読書灯の下に座り、資料とデータパッドを並べながら、同時に古文書を読み解き、ゲームの謎まで解いていく、優雅で知性的なエーフィの姿。

ギャロップは足を止めた。  
胸に、懐かしい記憶がよみがえる。

* 小さなポニータが、無口なイーブイにシュガーベリーを分けていたあの頃。
* アローラボールの木の下での、優しい授業。
* 迷宮の本から１ページが抜けていたせいで泣いてしまった、あの子。
* その心に灯した〈マジカルシャイン〉の残光は、今もなお消えていない。

蹄でそっと木の床を鳴らしながら、彼女は近づいた。

**ギャロップ**：「あなたがゲームで謎を解いてるなんて、夢にも思わなかったわ。」

**エーフィ**（顔を上げる）：「……ギャロップ？！　本当にあなたなの？」

**ギャロップ**（微笑みながら）：「昔の先生、まだ覚えてる？」

そっと抱き合うふたり。  
空気がわずかに揺らぎ、妖精と超能力の気配がふわりと交差する。

**エーフィ**：「あなた、このゲームの開発に関わってるの？」

**ギャロップ**（うなずく）：「ツンベアーじゃない方――ツンベアーじゃない、違う、**アマージョ**ね、彼女と一緒に作ったの。あなたやあなたの息子みたいな子を、企業の毒から守りたかった。でも……ゲンガーの件、聞いたわ。本当に知らなかったの。誓うわ。」

**エーフィ**（視線を外しながら）：「……彼、少しは変わったの。今はヤミラミの混沌監視下にあるし。」

**ギャロップ**（真剣に）：「でもあなたは、まだ彼に会わないつもりね。ちゃんと、自分が“何をしたか”理解するまでは。」

しばらくの沈黙のあと、ふたりはまた微笑み合った。

**ギャロップ**：「でも、あなた……本当に立派になったわ。ずっとこうなるって、信じてた。ねぇ、次のイベント制作、手伝ってくれない？」

**エーフィ**（いたずらっぽく笑って）：「サンダースを永久にループする謎かけに閉じ込められるなら、喜んで。」

—

こうしてギャロップは、心を少し軽くして図書館をあとにした。  
エーフィは再び画面へと戻り、その眼差しには微かに喜びの光が宿っていた。

――炎と理性から生まれる、次なる時代のf2p、フェアプレイ、そして脳を試す遊び。  
それは過去の輝きと、未来の知恵から紡がれようとしていた。